

浄土

monthly
JÔDO

12

December 2009



法然上人讃仰会



呉丘 富塚善吉の作品（表紙、表紙裏とも）。9ページを参照ください。

浄土

2009/12月号 目次

法然上人のお念仏（第3回）	阿満利磨	2
表紙の言葉	富塚善吉	9
連載小説 渡辺海旭	前田和男	10
浄土誌上ライブラリ「阿弥陀さま」（五）	佐藤春夫	18
今月のご法語	大室了皓選	21
会いたい人 柄本明さん③	関 容子	22
響流十方	袖山榮輝	30
朝めし礼賛	麻生タオ	34
変な駅気になる駅	長谷川裕 村上健	36
Jフォーラム		43
浄土句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48
表3 教えと法話 生野善應		



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会
主催
講演会

法然上人の
お念仏

第3回

法然上人の お念仏

阿満利磨

第三回

法然上人の念仏の特徴は、念仏は暮らしの「部分」ではなくて、暮らしの「全体」であるということです。暮らしのすべてを貫く、いわば基準になっているということです。これが法然上人の念仏の大きな特徴です。

念仏は生活の中でちよっと余裕があるときに言えぱいいというものではない。お風呂につかっているときに「ああ、きょうは気持ちがいいな。南無阿弥陀仏」と、眠れないときにちよっと睡眠薬がわりに念仏をしてみようかというような「部分」ではないのです。部分ではなくて、暮らしの全体、それを貫いてこそお念仏の意味があるわけです。そのことを法然上人は、「念仏申されんように生きよ」とおっしゃったわけです。

私たちが現世を生きていく上で法然上人が唯一注文をつけられたのは、「現世を過ぐべきようは念仏申されんように生きよ」ということだけだったわけです。これはなかなか味のある、非常に、それこそ奥深い言葉であります。

普通の宗教は、この世で生きていくときにいろいろな約束事を要求します。ひどいものになると、お布施をたくさんあげろとか、高い水晶を買えとか、いろいろなことを要求してくるものなんです。

しかし、法然上人は「念仏ができるように生きなさい」と、これだけなんです。たったこれだけ。人殺しをしちゃいかんとか、余り金をもうけ過ぎるなとか、そこまではおっしゃっていないんです。

だからといって、簡単に人を殺していいとか、人が苦しんでいるのに自分だけ金をもうけたりとか、そういうふうになるのかどうか。それは後でまた話をしたいと思いますが、「念仏申されんように生きよ」と、それは念仏中心の暮らしをせよということです。念仏

を最優先させる生き方をせよということだったのです。

ですから、何でもかんでもすべて念仏中心。念仏が最優先でありますから、ほかの人から見ると大分偏った人に見えたんでしょう。

法然上人の伝記の中を見ても、この法然上人のことを「偏執に満ちた人」と言っている人がいます。その代表が明遍上人です。高野山の当時の有名なお坊さんです。

明遍さんは高野山の僧ですが、『選択集』を読んで「ああ、この著者は偏執の人である、法然は偏執の人である。偏った人である。こんなに偏っているほうにもならない」と、このように思っ、人にも「あの人はちょっと偏り過ぎているんじゃないの」と、「念仏、念仏、念仏」と。

こういうことで明遍さんという方が法然上人のことを非難しておられた。ところが、あるとき、その明遍さんは夢を見たわけです。中世の人はよく夢を見ます。

私どももよく夢を見ますが、現代と十三世紀の夢のどこが違うかというと、十三世紀の人には、夢は神様や仏様とつながる大事なコミュニケーションだったのです。今の人間は、五臓六腑が疲れているとか、夢は大体悪いものだと考えます。

その明遍上人が夢を見られた。そうすると、夢で、大阪の天王寺の西門、お彼岸のときに太陽が沈んでいく、その天王寺の西門で、身分のあるらしいお坊さんがおかゆをさじで、そこにたくさん集まっている病人の口に一口一口入れて回っておられる。そういう夢を明遍は見ただけです。

それで、あの方はだれかと。「みんなにおかゆを一口ずつ配っておられるのはだれか」と聞くと、「法然上人だ」という返事が返ってきた。そこで、明遍はつくづく思うところ

があつたわけです。

つまり、病人の容態が軽ければ、病人のその病氣の中身が軽かったら、みかんとか梨とか柿といった果物を食べさせることができる。しかし、病状が重くなってくると、重湯しか入らなくなってくる。

現代はお釈迦様が亡くなって久しく仏教が衰えています。我らは全員重病人である。既にある法相宗とか天台宗の教えなどは、あたかもそういう重病人にみかんや梨や柿などを食べさせて栄養をつけさせようという行為に等しいと、とても耐えられない。そんなものは食べられない。ひたすら重湯をいただくしかないのです。

ですから、専ら念仏するということは、実は重湯を口にするのと同じで、重湯だけが生死（シヨウジ）の世界を脱する唯一の方法なんだということを、夢の話から明遍は悟ります。だから、明遍も偉い人です。

そして、今まで修行していた密教を捨てて専修念仏に帰依するようになられるわけですが、こういうひたむきさというか、「念仏だ、念仏だ、念仏だ」とおっしゃったことは一見人々に誤解させるところがあるけれども、その意図がこのように「すべての人を仏にさすば済まない」という平等の慈悲、「一切遍くも摂せんが為の平等の慈悲」という思いに支えられている。これはとても大事なことです。

ですから、「念仏を最優先させる」という生き方というのは、逆に、念仏が妨げられるときには、断固としてそれを拒否するという強さを持っているということです。

この法然上人の言葉で言えば、念仏の妨げになるようなことが生じてきたら、それが何であつても、何なりともそれをよろづ、厭い捨てて、そういう念仏の妨げとなるものをと

どむべしというふうに言っておられる。この念仏が妨げられるときには断固としてそれを拒絶する。そして、念仏を貫く。こういう強さが法然上人の念仏の大きな特徴です。この念仏の強さというか、これが今日、私が強調したい点です。

これは法然上人が流罪に遭われて四国に行かれるときに、この念仏の強さというものが、大変よく出ています。

この法然上人がいよいよ流罪となつて京都を離れるときに、お弟子さんたちがたくさん集まっていますが、その中の一人が「高齡のままでこの流罪の地に赴かれる。これは上人の一命にかかわることになる。もし、上人に何かあれば、法然上人から教えを受けられなくなるではないか」と言うわけです。

また、一面、「自分の師匠が流刑の処置を受けた。流罪の師匠を持つということは、世間に顔向けもできないではないか」と。天皇の命令であるから表向きは「念仏を広めることは中止する」と言つて、「内々で教えを説くというようなことはできないものでしょうか」というふうに法然上人に頼んだ弟子もいたわけです。

それに対して法然上人は、「人間、どこに住むかは問題ではないし、また、人の命は京にいても尽きるものは尽きる。およそ念仏というものは、真実の教えである限りは、これが広まっていくなことをとめることはできない。世間体ばかりをおもんばかつて教えを隠すという必要がどこにあるのか。もし、自分たちに気にすることがあれば、我々を弾圧した者が仏法を守る神々のとがめを受けるであらうということである」ということを話された。

そうすると、ある人が「そういうことを今この場で説かれるべきではない。ここに見送りに来ている者もみんな返事をしてはいけない」と制するわけです。そこで法然上人は、

「あなたは經典の教えを見ていないのか」と、弟子はこのように答えます。「読んではおります。知っております。しかし、世間の思惑は大事です。世間様がどのように思うか。そのことをおもんばかる必要はあるのではないですか」と言った。

すると、法然上人は顔色を変えて、「自分は死刑を行なわれるとも、念仏の教えを説かずにはおられないはずだ」と、「われたとい死刑に行なわれるとも、この事言わずはあるべからず」と。そして、伝記の言葉で言うところ「至誠のいろもとも切なり」と。その顔には至誠、誠の極まりですね。その至誠のいろが輝いている。それを見て、ほかの弟子たちは感動して涙を流したという、こういう一節が伝記の中で説かれています。

この法然上人の「われたとい死刑に行なわれるとも、この事いわずはあるべからず」とか、「なんぞ世間の機嫌をはばかりて」、この「機嫌」というのは思惑ですね。「なんぞ世間の機嫌をはばかりて、経釈の素意を隠すべきや」と。

そういう念仏者は世俗的なごまかしとか、そういうものと妥協して世評によって右往左往してはならない。念仏というのは、そういうことによつて左右されることのない最高の価値を持つているものである。このように言われていることがすごく大事です。つまり、念仏がいかにすばらしい価値を持ったものか。それを妨げるものは何もないということを宣言されたわけです。

この「四十八巻伝」には、このとき法然上人の朝恩、「朝廷の恩」だと。この際、流刑で四国に流されていくことは、今まで念仏と縁を結ぶことができなかつた人々に念仏を説く機会を与えることになるのだから、それは朝廷から与えられた恩だと言ふべきだということ、**「朝恩」**という言葉がありました。

二、三年前に流罪八百年か何かの講演会に京都まで行きました。そのときに浄土宗のある方で、「流罪八百年とか、流罪八百年とか言うのは間違いで、朝恩を受けて八百年と言うべきだ」と言われた方がいたわけです。

しかし、私はやはりちよっとずれていると思いました。「朝恩」ということで流罪の本質をすり替えてしまつてはならないわけです。明らかに法然上人は、その念仏のために弾圧されたわけですから。ただ、その弾圧に対して、法然上人は念仏至上主義をもつて応えられた。われたとひ死刑に行なはるとも念仏のことを言わずにはおれないんだと、強く言われたわけです。

だから、朝恩でありがたかったというのではなくて、こういう弾圧の真っ直中で念仏をなおかつ高々と掲げて歩もうとされた。その法然上人の精神を受け継ぐということではないと、教団は立派になつても、念仏は滅びますよということなのです。

阿満利庵（あまとしまろ）

明治学院大学名誉教授（2006年4月から）

仏教雑誌「蓮華無窮」主宰

「法然の衝撃」「法然を読む」著者

近著「教義抄―注解・現代語訳・解説（ちくま学芸文庫）（2009年5月刊行）

『浄土』 2009年表紙の

呉丘 富塚善吉

友禅模様師

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

呉丘の作品の多くは呉服商とその客筋に渡り、散逸したが、外孫、遠戚等に愛蔵されていた着物数十点をカラー撮影し、また多作であった当時の仕事の記録として残されたアルバムを発見、貼られた多量のモノクロ写真を一括して、一冊の写真集が編まれ、上梓されている。

題名 「手描友禅模様師 富塚善吉の仕事」

発行 市原由美子

発売 西田書店

定価 本体3000円＋税

手描友禅模様師
富塚善吉の仕事



12月号

表紙 勸進帳 弁慶
表紙裏 桜に松

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十回

敬虔なる愛弟子
磯村英一 その1



対GHQのやり手の 渉外部長として

昭和二十六年二月二十五日、日曜日の午前九時すぎ。新宿中村屋の大女将・相馬黒光、カルピスの創業者・三島雲海、浪漫詩人・土井晩翠、映画監督・今井正らとともに、NHKのラジオ番組「光を掲げた人々」に耳を傾けようとする男がいた。

後に東洋大学学長となり、日本都市学会長をつとめるなど都市社会学の国際的権威であると同時に、同対策事業の実現に尽力した人権運動家として知られる磯村英一である。今回は生涯の恩師、渡辺海旭が取り上げられると、芝中学の同期でNHKに勤めていた衆議院議員の川崎秀二から事前に聞かされていて、放送を楽しみにしていたのだ。

磯村はこのとき四十八歳。東京都の民生局長として戦災者と海外からの引揚者の援護にあたり、それ以前は渉外部長として敗戦後日

本を占領統治している進駐軍との折衝役をつとめた。終戦当時、官選の渋谷区長だった磯村は、区庁舎の接収を迫る米軍を思い留まらせた交渉術が都や国の幹部たちに高く評価され、東京都全体の対GHQ（連合軍総司令部）の渉外責任者に抜擢されたのである。

辛い戦争が終わって六年がすぎていたが、磯村にとっては十年、いや二十年にも思えるほど苦難の連続であった。人間として魂を傷めることのなんと多かったことか。

そんなときに、磯村は中学時代に薫陶を受けた渡辺海旭をしばしば思ったものだった。海旭先生が存命だったらどうされるだろうか。

占領軍将校たちの住宅を確保するため、洋間と水洗便所のある都内の日本人邸宅は強制接収されることになった。運悪く「目星」をつけられると、二十四時間以内に立ち退きを命じられる。転居先がなければ修理期間中に限って物置に留まることが許されるという一

方的なものだ。その適否審査に同行するのも磯村の仕事だ。

いきなり土足で上がり込む米兵に子どもが泣き叫ぶ光景は、磯村に秋田のなまはげを思い起こさせた。それでもぎりぎり市民の生命が護られれば敗戦国だからいたしかたないのかと苦渋の思いで諦めもした。しかし、ときに彼らの要求は度を越すことがあった。たとえば、銀座の松坂屋は、四丁目の和光ともども米軍施設に接収されていたが、そのトイレを大理石にせよというのだ。理由はたまに買物に訪れるマッカーサー夫人のためだという。「これは占領政策とは無縁だ」とダメを出したが、「高い所」から説諭されししぶに「白鳥二羽」の要求がきた。マッカーサーの息子を慰めるためにアメリカ大使館の池に放つのだという。これには磯村も憤然として首を覚悟で断わった。

と、民政局長に転じてからの辛い事件が甦

った。ある雨の日だった。GHQ将校から浅草公園に「行き倒れ」がいるから「処理せよ」との連絡があった。行ってみると、老女がゴミの山のなかで、虫の息でなにやら口ずさんでいる。「出征兵士を送る歌」だった。

「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たからにや、手柄立てずに死なうか」

この老女は、つい三年ほど前までは、これを何度も歌っては、日の丸の小旗をうちふりながら、ひよっとしたたら息子や孫を、そして町会の若者たちを「天皇の赤子」として戦場へと送り出したのかもしれない。手をつくしてなんとか病院へ送りこみ、老女は一命をとりとめたが、それから一年ほどして磯村のもとへ「死亡」の知らせがきた。弔間に出掛けると、引き取る縁者もおらず、無縁仏になるという。磯村は、無念が胸をついて涙があふれてとまらなかった。

そうそう、GHQの将校から、「東京の復興はヨシワラから」といわれ、米兵たちのた



光風の昨風の青るすも心中を寺遊本町根緒しれらせ惜愛（きよ）頃年九八正大）年曉の入鼓
 會集の「風華年宵」や「ひとつの上山」つしと衣を衣山の此れき移にこを新ずる夏毎
 同は文詩の左（寺遊本が物建る伊見に形角三の中の林左緒より失中）たれら居てしをどな
 のもしれらせ宵に氏出井代徳寺

めの「慰安施設の安全確保」を要求され、決然と動かざるを得なかったが、あれもなんとも屈辱だった…。

こうして、つぎからつぎへと苦い出来事が連鎖となって思い出されてくる。磯村はそれを断ち切ろうとして、首をふって、こうつぶやいた。

——海旭先生なら、教え子の私の戦後の仕事について、なんといってくれるだろうか。

磯村には、どうしても「精一杯よくやった」と褒めてもらえる自信はなかった。

日本初の女性記者・ 母の勧めで芝中へ

そんな感慨にふけっているうちに、ラジオドラマでは海旭のドイツ留学時代のエピソードにはじまり、帰国後の僧侶・学者としての活躍ぶりが紹介されていたが、磯村と海旭とのつながりの原点である芝中の校長時代へとドラマは展開しない。

まだかまだかと待っているうちに、磯村の想念は、芝中時代の海旭との出会いへとフラッシュバックしていた。

海旭との出会いをつくったのは、磯村の母親、春子だった。磯村春子は、敬虔なキリスト者として日曜学校を主宰するいっぽうで、日本初の女性新聞記者となり、青踏社の女性たちとも交わるという時代の最先端を行く女性だった。（なお、後の昭和六一年、磯村の母である春子の感動と波乱に満ちた生涯は、NHKの朝の連続テレビ小説「はね駒」としてドラマ化され、春子役は斎藤由貴が演じて国民的人気を博す）かたや父親は手広く貿易商を営み、磯村家は人もうらやむ「華麗なる家庭」であった。

しかし、ある夜弁護士がやってきて父親と深刻な話し合いをしてから磯村家の暮らしは暗転する。父親が連帯保証人になっていた相手が不渡りを出し、そのあおりで資産のすべてを失い、家族十人（磯村英一を筆頭に子供

六人、両親、祖母と親戚）が新聞記者の母の細腕に頼らざるをえなくなったのである。

父は長男の磯村に中学の進学はあきらめ、小僧奉公に出て実務を学ぶようにすすめるが、母親が断固として反対した。この子にはなになんでも中学にいかせて学問をさせる。そこで母・春子が入学させたのが芝中学だった。母はクリスチャンであり、磯村もまた洗礼を受けていた。それでもあえて「異教」の仏教系の中学へ進ませたのは、校長の渡辺海旭が浄土宗の僧侶でありながら社会事業にも熱心な度量の広い宗教家であり、またすぐれた教育者であることを知っていたからである。

母の目に狂いはなかった。さすがは日本初の女性ジャーナリストだけのことはある。洞察力は見事だった。海旭の薫陶で、息子・英一に後に行政マンから学者へ転身するときの学問的基礎が身についただけではない。人間としての生き方の基礎もそなわった。さらに、

後でわかったことだが、家庭の財政事情で学費がしばしば滞ったが、そのつど海旭がすべて立て替えてくれたのである。

海旭は、当時、府立一中（現在の日比谷高校）の校長のそれをはるかにしのぐ、東京で（ということは日本で）一番給料が高い校長といわれたが、実は、その俸給の多くは磯村のような「苦学生」の授業料や寄宿料に立て替えられていた。それを後で知って、磯村はますます海旭を尊崇するようになる。

生徒の自発性を引き出すのが海旭流

しかしながら、芝中に入学当初の磯村少年にとつては、海旭はただただ近寄りがたい巨大な存在だった。海旭と身近に接するのは、週に一回の海旭による修身の授業だが、吃音のうえなかなか理解できない。だから適当に聞き流すか、中には私語をする生徒もいる。もつと不届きな輩になると、海旭の吃音をま

ねて周囲の笑いをとって楽しんでゐる。それでも海旭は、とがめることもなく、おかまいなく肅々と話をすすめていく。磯村はその海旭の態度を不思議に思い、ますます距離感を覚えながら、他の生徒たちに同調していた。

そんなおり、海旭が住職をつとめる深川の西光寺へ呼ばれたことがあった。海旭の修身の授業では、いつもというわけではないが、母親並に英語ができるようになったといと、手作りの英単語帳をくって暗記の内職をすることがあった。それがバレたのかと思い、手厳しく説教されるのを覚悟で半ばおびえながら出かけていった。すると、海旭は「庭の掃除をしようか」と磯村を誘うと、一緒に境内を掃除したあと、芋をふかしてごちそうしてくれただけで、なんの叱責も説教もなかった。海旭先生は自分に何をいいたかったのだろうか。深川の西光寺から自宅のある品川御殿山までの帰途、あれこれ考えたが、答えなど見つからない。見つからないから、それをこ

れからじっくり考えてみようという気持ちになった。そして、以来、磯村は、海旭の修身の授業を熱心に聞き入るようになった。それでもすんなり理解はできなかったが。

今にして思うと、西光寺へ呼ばれたのは、海旭の課外授業だったのだろう。そうやって生徒たちに自発的に考えさせる、それが海旭流なのではなかったのか。これは長じて知ったことだが、海旭が生徒たちを叱ったり説教したのは、一時カンニングが流行ったときが最初で最後だった。しかも首謀者の父親を呼んで「あなたの子供にこんなことをさせて校長として申し訳ない」と涙にむせびながら詫びたという。遅刻に厳しい芝中だったが、海旭が正門で立つことがあっても、黙っているだけで遅刻した生徒をとがめたことはなかった。本来なら生徒監から生徒手帳を取り上げられるのを免れた生徒たちは、不思議なことに、二度と遅刻はしなかった。これぞ海旭流。海旭がつくったとされる芝中校則「遵法自治」

とはこのことなのだ。教育では、叱って躾ける、スバルタで叩き込む、これは「下」と言われる。そして「上」と言われるのが海軍元帥・山本五十六の策。すなわち、「言ってみせ、やって聞かせてさせてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」。たしかに上策だが、海旭はさらにその上をいく「上の上策」である。何も言わずに、なにもしてみせずに、ひたすら考えさせる。ことさらにほめもしない。今の自分がまがりなりにも仕事ができ周囲から評価されてきたのは、海旭流教育のおかげだ。往時を思い出して磯村は今更のようにそう気づかされたのだった。

またまた海旭の生徒たちの自発を促すやり方の「体験事例」を思い出した。

磯村が中学二年の大正五年二月九日、芝中是不審火によって校舎を全焼した。翌日から、辛うじて焼失をまぬがれた屋内体操場、興国殿、銃器庫を仮教室にして午前午後の二部で授業が再開されるが、焼け跡に黙然と立ち続

ける海旭の姿を磯村は忘れることができない。何かを語りかけるわけではない、ただひたすら立ちつくして生徒たちをみつめている。磯村はその姿から声なき声を聞いた気がした。すなわち「学校という場は校舎ではない、人である。たとい校舎が焼けようと、人は焼けないのだ」と。おそらく磯村の他にも海旭の声なき声を聞いた生徒がいたのだろう、朝礼には焼け爛れた校旗が掲げられていたが、生徒たちの間から自発的に募金がはじまり、やがて新しい校旗が校庭にへんぽんと翻った。芝中生は、大正八年までの五年間、トタン葺き平屋のバラックで、夏は蒸し風呂状態、雨天にはトタンに当たる音に悩まされたが、新しい校旗が生徒たちを上げましつづけたのである。

(つづく)

佐藤春夫



——子供にわかるお話——

阿弥陀さま (五)

阿弥陀さまの お名前

ところで阿弥陀さまのお名前であり
ますが、これは本当は南無阿弥陀仏さ
まと申されるので、阿弥陀さま御自身
がはじめから、南無（お頼みます）
という言葉をお名前の上にくつつける
事をお望みになってそうお名前を御自
分につけられたのです。と申しますの
は、この仏さまは大へん御親切な仏さ
まですから、いつも人間から何かを頼
まれたがって居らっしゃるのです。人
間がとかく苦勞だらけの生き物だか
ら、いつも他人の助けがほしいに違ひ
ない。そうして自分を呼びかけるよう

な時には、きっと何か頼み事があるに違いないから、いつそ御自分のお名に南無という字をつけて置かれた方が早いとお考えになったのでした。そうしてこのお名前をお呼び申しさえすれば、観音さまがそれをお聞きとりになると、一緒にどこで誰がどういうわけで呼んだかというわけまでもうすっかりお判りになるのです。そうして、それが極楽浄土に生れ出たいという希望を持っている者だと判り次第、阿弥陀さま御自身が、時にはおひとりではなく観音さまや勢至さまをはじめ、もっとたくさんのお供をおつれになってわざわざお迎えに出られるのでございます。これが極楽浄土を統治する方々やその統治の仕方などのあらましであります。

さて次にはこの結構な国の人民がどんな風に生れ、どんな文化をもつて、どんな風に生活しているのでしょうか。

仏さまに なる方ばかり

浄土、阿弥陀さまのお国は、この上なく莊嚴なところに開かれて阿弥陀さまや観音さま勢至さまなどのお慈悲とお力とが国中くまなく行き渡っている上に、その国の空気や木の葉をゆり動かす風の音にさえ仏教の教えがしみこんでいるという事はもうお話したとおりですが、それではそんな国にいて衆生、その国に生を享けている一般の人々はどんな有さまで生活しているのでしょうか。その文化の状態はどんなでしょう。

ここには地獄や餓鬼道、畜生道などというような所は一つありません。浄土の人々は悪い事を一つもしないで生きられるように出来ているのですから、悪の報いとして墮ちる地獄や餓鬼、畜生などの必要はない筈です。犯罪人のない国には刑務所の設けはない道理です。そればかりか浄土の人々は死後でもよその仏国の地獄や餓鬼道畜生道などへ墮ちることは絶対にないのです。それ故一度浄土に生まれた人はやがて仏さまになるばかりというわけです。

浄土の人々も寿命というものはあります。けれどもこれは人々の望み次第に延ばしたり縮めたりすることが出来ることになっています。それでは誰も彼も何百年も何千年も生きていたいだろうと想像をするかも知れませんが、それは我々普通の世界に住んで普通の人間の常識を基にするからそう考えられるので、仏教の教義で育てられて生きている浄土の人々は早く成仏することを望むに違いないとは思われますが、いつまでも生きていたいという貪欲な気持は無さそうに思われます。この上なしに結構な浄土にいてさえ寿命の短いのを希望するという途方もない人がいるらしいのはこのためでしょう。何にせよこの国の人々は我々にはとても想像も出来ない世界のなかで、想像も出来ない思想を持って生きているのですから。

(次号につづく)

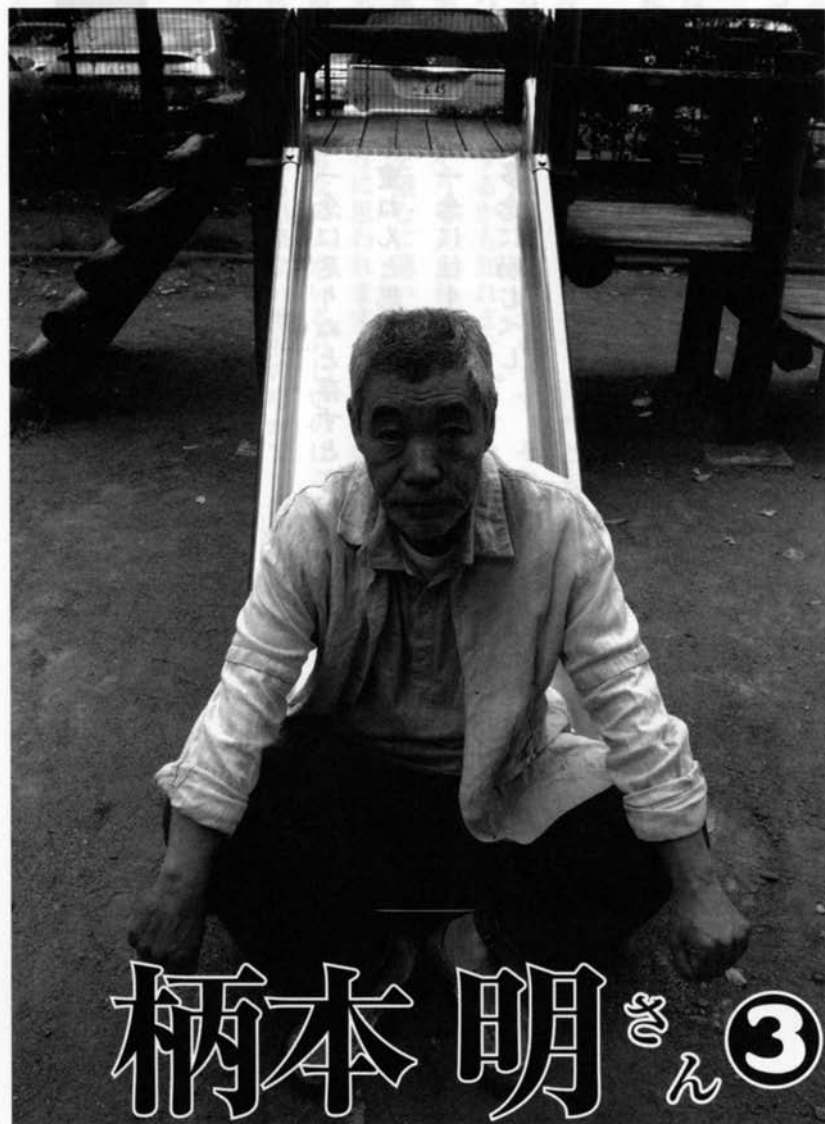
往生は一念に足りぬと存ずとも、
多念を重ねんと思ふべし。
信をば一念に往生すと取りて
行をば多念に励むべし。

(常に仰せられる御詞)

大室了暗選

連載

会いたい人 関 容子



柄本 明さん ③

撮影／タカオカ邦彦

渥美清さんはインタビューされることが嫌いだっただけ。

「渥美さんがよくおっしゃってました。その人間がやってるものだけを見てりやいいんで、あとは何も知りたくない、って。どんな考え方をして、どんな生活してるのか、なんて知る必要ない、って。要するに役者は見せ物なんだ、って。美しい玉三郎さんの舞台を見て、ああ、いい見せもんだったねえ、って感心してらしたことがあります」

なるほどとは思いますが、私は好きな俳優の舞台や映像に感動すると、どうしてもその人に会って、素顔や人柄や考え方を知りたくなる。

「それはある種の批評だと思っただけです。批評性を伴ったインタビューは、単なる興味本位のとは違うでしょう。しかし、渥美さんの晩年のテレビドキュメントを見ていたら、スパーマンを演じる俳優はロープで釣られて飛んでるだけなのに、その俳優に出会おうと

客は飛んでみせろ、って言う。これ、悲しいよね、って、しみじみ言っていましたね。ぼくは芝居を観に行って、いつもまい人なのにとときどきやる気がないように見えることがあるのって、嫌いじゃないんですよ。舞台の役者さんがつねに一生懸命で全力投球して、いつも感動させるって、あり得ないと思うしね。今日はやりたくない、疲れたな、というのと同時に大事だと思う。機械のような、毎日同じハイレベルを求めるのは、傲慢ってものでしょう。まあ、お客は入場料払ってはいくらでもお客と役者はヒフティヒフティだと思おうしね」

そこがライブの醍醐味なのだろう。それで同じ芝居を何度も観に通うことにもなる。

柄本さんはかつていい演劇にもずいぶん出演している。ベケットなら『ゴドーを待ちながら』と『エンド・ゲーム』。イヨネスコなら『瀕死の王様』。そしてチャーホフの『ワ

通 野

会いたい人

「お客が笑わない、シーンとした芝居をやろう」をためした「お茶と説教」(1986年本多劇場)



柄本さんが新しい試み、「お客が笑わない、シーンとした芝居をやろう」をためした「お茶と説教」(1986年本多劇場)

柄本明さん ③

撮影：山本サトウ雄吉

「ニヤ伯父さん」や『タバコの害について』など。

「二十一、二のころ、ゴーゴリの『外套』という貧乏官吏の話を読んだとき、この作者は悲しい人なんだな、幸薄い人なんだな、ロシア文学ってすごいな、って思ってたんです。それで同じロシアのチエーホフにも興味を持ってたんですけど、一人芝居の『タバコの害について』は大学教授の演説で、チエーホフの台本通りにやると二十分以内に終っちゃう。それで、チエーホフの短編小説からいろいろ引っぱってきて、一時間十分くらいのもので作って、これ、日本だけじゃなく、モスクワ芸術座でも上演したんです。同じ建物の中に図書館があつて、そこでロシアの昔の名優が演じている『タバコの害……』の映像を見せてもらいましたけど、これは台本通りですぐ終っちゃうし、ぼくのやるのと全然違うと思つたので、気持ちが切り変つてらくに演じることができました」

この公演の様子を私はNHKテレビの「芸術劇場」で観た覚えがある。ロシア人の観客たちが、とても面白がつて興奮していたつけ。その柄本さんが平成十年、商業演劇の『浅草パラダイス』に出演すると聞いたときは、ちよつとびつくりした。

「民放テレビのドラマ『森の石松』で、勘三郎（当時勘九郎）さんが石松、ぼくは石松をかくまう七五郎の役で、ぼくの女房の役が勘三郎さんの姉上、波乃久里子さんだったんです。そのことから『浅草パラダイス』に出ることになったんですが、新橋演舞場の広い舞台で、昼夜芝居して、しかも二十五日間休みなし、なんて初めてのことであったし、同じ舞台で勘三郎さんと藤山直美さんを間近に見て、これが噂に聞いたプロの役者つてもものなんだな、すごいな、と思いましたね。あんまり打合せもしないで、舞台でこうなっちゃったというときの対応……怖ろしい場面を何回も見ましたからね。でも、そういうお二人が

ちゃんとアマチュア精神も持つてるところがすごいんです。勘三郎さんが、柄本さんは目え見て芝居してくれるから有難い、なんて言つてくれましたから」

『浅草パラダイス』は、勘三郎・直美が夫婦役で、柄本さんは親しい喧嘩友だちの役。

この三人以外のキャストがいろいろ變つて、何年にもわたつて上演を重ねてきた。

「舞台で三人で並んで座つたりするじゃないですか。すると片方は先代中村屋の息子で、片方は藤山寛美さんの娘でしょ。何でオレがここにゐるんだらう、という氣がしてきて、とてもついて行けない、と思つちやう。でも勘三郎さんは優しく見てくれて、ぼくが芸者の恰好するときは自分のお弟子さんに世話さしてくれて、ほんと、有難かつたです。直美さんは……怖くて口きけなかつた。向こうもほとんど無視みたいなね(笑)。この人、何がきんの？　みたいだね(笑)。怖いですよ。頭がいい人だし。でも、おかげ様で今は非常

に仲良くお付き合いさせて頂いています。」

『浅草パラダイス』初演の千秋楽のあと、勘三郎さんからこんな話を聞いたことを思い出した。

「柄本さんが直美に訊いてるの。あの、お父様はおいくつで亡くなられたんですか？　つて。六十一です。ああ、ずいぶん早く亡くなられたんですね、つて。それで二十五日間昼夜夜休みなしの公演が終るころになつたら、また柄本さんが訊いてるの。あの、お父様はこういう舞台の生活をどのくらい続けられていたんですか？　つて。どのくらいつて、何年も何十年もですよ。ああ……、ずいぶん長生きなさいましたね、つて(笑)」

柄本さんは、「人間が人間を見物するつて、すごい残酷なことですよ」と言う。ちよつと怖い話になつた。

「スターというのは、大きな不幸を背負つてゐるんですね。極端な言い方をすれば、大衆はその不幸に拍手するんです。もっと不幸に

なれ、もっと不幸になれ、って。それこそ寛美さんにしても、美空ひばりさんにしても、ジエームズ・ディーンにしても、最近ではマイケル・ジャクソンなんてまさにそうでしょう。あの人は死ぬんじゃないか、って、みんなが予測してた、って気がしません？ 絶頂のときに若くして亡くなると、世界中が思い切り涙を流すんですね。直美さんで言えば、お父さんの才能を娘が受け継いで、ほんとにそっくりですよ。お客はそれを見て、笑ったり感慨に浸ったりしながら、思いつきり拍手をする。それは才能に対してというよりも、舞台の人のすさまじい不幸に対して残酷に拍手喝采するんですよ。そしてお客は、ああ、ああいうふうにならないでよかった、と心の中でちよっと思つて、帰りの電車の中で自分の平凡な人生と相殺していくんですよ。大衆はスターにあこがれるわけですが、それと裏腹に嫉みがあつて、ハッキリとは思わなくても、ああ、自分はこれでよかった、と思う

んですね」

すごい話を聞いてしまった。

観る側の私としては、もうちよつと人間を信じてもいいような気がするが、悲しいことに柄本さんの言うこともわかる気がする。

「東京乾電池」は下北沢を中心に地道な公演を今もずっと続けている。この秋には加藤一浩作品集として四作品を日替りで上演し、『愛とその他』には柄本夫人の角替和枝も出演した。私が観たのは『イリーニャの兄弟』。終演後に柄本さんのトークがあるので、これにした。

客席数は百に満たないようなシアター711。舞台には幕がなくて、さつきからずつと二つの大きな段ボール箱が置いてある。開演時間になると、いきなり片方の箱からボンと男がとび出してきて、そこらにある物を無言でいじったりする。もう一つの箱から「イリーニャ……」と寝言のような声が聞こえ、さ



稽古の合い間にも柄本さんらしさが漂っている(1983年本多劇場「店長さんのアックスボンバー」)

つきの男が箱に入ってしまったと、今度は寝言の男がボンととび出して、意味のない行動をする。何回かこの繰り返し。

劇が終って、笑いながら現れた柄本さんが、「最初のイリーニヤ、イリーニヤ……の寝言で、もう帰ろうかと思った人は？」

と会場を見渡したので、いつもそういうときはうつむく私も、思わず手を挙げる。その昔、柄本さんが喫茶店の二階で芝居を観て、こういう場所なら自分の発言の場もあるんじゃないか、と思ったという話を思い出した。

柄本さんに感想を求められて、最初から最後までサツパリわからなかったけれど、途中で何の脈絡もなくパーティーに出かけるみたいな群衆が賑やかに現われて、まるでフェリ―二の映画のようで楽しかった。そのあとまた静かになって、こういう芝居って、別にわからうとしないで、寂しさとか空しさとか何か勝手に感じ取ればいいんじゃないんでしょか……といったようなことを答えてその場を逃れた。

柄本さんが、これよりはもうちよつとわかりやすい岸田国士の二人芝居『命を遊ぶ男ふたり』に出演すると聞いて、翌日またシアター711に出かける。

この劇場は入って左に小さなドアがあつて、右側の受付の女性に入場料九九九円を支払ったら、ドアの鍵をあけてくれた。私が開演午前十時半ぎりぎりに来たので、もう閉め切られていたのだった。

鍵がかかっていた理由はすぐにわかつて、

急な階段を登り切ったらそこが舞台裏を兼ねていた。白衣を着て、包帯を顔にグルグル巻にした長身の男が暗い廊下に立っているのぞつとしたら、それが柄本さん……とわかつたのは、「客席はこっちです」と教えてくれた声に聞き覚えがあつたから。

この作品は岸田国士が大正十四年に書いたもので、化学実験の失敗で顔中火傷を負った男と、もう一人の自殺願望の男が、踏み切りを前にして飛び込む順番をゆずり合う。

なんともブラックでおかしな芝居だった。終つて、私がぼんやりしていたら、普段着になつた柄本さんがすぐ現れて、照れたような顔でこう言つた。

「役者の子でもないのに見せ物になつてますね。これも業の深さですかね（笑）」

（おわり）

念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。ゆえはいかんとなれば名号はこれ万徳の帰する所なり。…仏の名号は余の一切の功徳に勝れた。故に劣を捨て勝を取りて、もって本願となしたまふか。次に…念仏は修し易く、諸行は修し難し。…一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて本願としたまふか。

法然上人「選択本願念仏集」第三章段抜粋

（阿彌陀さまがその西方極樂浄土への往生をかなえる行としてお念仏の一行を選択されたのは、およそ二つの理由が考えられます。まず一つは）お念仏は勝れた行であり他の行は至らないからです。なぜかというとお念仏というお名号には阿彌陀さまに具わるもろもろ功徳がみなすべておさめられているからです。…み仏の名号には他のあらゆる修行に勝る功徳があるのです。ですから阿彌陀さまは功徳の至らないものは捨て功徳の勝る行を選び取って本願とされたのではないでしょうか。次にお念仏は実践しやすく他のもろもろの修行は実践しにくいものです。…等しく万人の往生をかなえるようにと、難しい修行を捨て、易しい修行を選び取って本願とされたのではないのでしょうか。

二つを一つに合わせるといふ選択

「特別減税に補助金！」

車にはとんと興味がない私にとっても、やはり、それは魅力的な響きだ。エコカー減税云々のことだ。拙寺の愛車も、新車で乗り始めて年が明けるとちゅうど九十三年。そう、今年度に限り、十三年以上経過した車を廃車にしてエコカーの新車に買い換えれば、減税の上、国から結構な補助金がいただけるというのだ。それなりにいろいろ愛着のある車ではあるけれども、今どき、少なからず排気ガスを撒き散らす車にいつまでも乗っていていいのかという思いもあるし、耐久年数も気になるところ。この際、買い換えを検討してみようという気になった。

さて、いざエコカーに限定して新車を検討してみると、これがなかなか候補を絞れない。というのもエコカーには四輪駆動車（四駆）が割に少ないのである。四駆はやはり低燃費をクリアーできないのだろうか。とはいえ、今の車を購入した時の条件は、檀家回りなど一人で乗ることがほとんどながらそれでも家族全員を乗せられることと、四駆であることの二つだった。

拙寺のある長野は山国だし雪も降る。ほかにも雪深い土地はたくさんあるだろうが、長野の市街地でも一度降った雪が溶けずに何日も車道を覆うことがあ

る。大晦日の「おさみしおとし」（―その年に亡くなった方の家々にあらためてお悔やみにお伺いする長野市内の風習。これについてはいずれ筆を執ろう―）や正月の年始回りには車が必需品。いくつもの轍が複雑に絡む雪道には悪戦苦闘させられるが、そんな時、四駆は頼りになる。

もっとも長野でも二輪駆動の車はたくさん走っている。雪道に自信のある運転手さんも多いということなのだろうが、雪の坂道・山道で少なからず肝をつぶした経験のある身としては四駆なればこそ助かったという思いが安心感にもなっている。車の大きさはともかく、今回も四駆という選択は外せないのであるが、四駆にして、しかもお買い得な低燃費のエコカーというのは、今はまだ、相反する二つの条件である場合が多いらしい。

ところで「南無阿弥陀仏」と唱えるお念仏は、いつでもどこでも唱えられる。自分の胸に聞こえるだけの小さい声でもいい。阿弥陀さまの浄土に憧れを持ってお唱えすれば、それだけで往生をかなえて下さるというのが阿弥陀さまの本願だ。

「規律厳しい修行生活漬けになって深い精神集中のすえ真理を見極めるほどの功徳を積まなければ往生はできない」だなんて言われたら出家して俗世を捨て

るしかなく、でも、そうまでしても、それはそれで脱落者が後を絶たない難儀なこと。出家せずとも、俗世に喘ぎ人生に悩み躓きながらでも往生がかなう易しい修行を設ける必要があると、阿弥陀さまはそうお考えになられたのだ。

でも、ちつとばかりの易しい修行の功德で往生がかなうほど阿弥陀さまの浄土はお安くない。やはりたくさんの功德が必要だ。でも、それには尊くも厳しい修行が必要になつては話は元通り。そこで阿弥陀さまは考えた。

どれほど尊く厳しい修行でも決して及ぶことのない最も勝れた功德を生み出すことのできる修行が、誰もが修められる最も易しい修行であればいい。

相反する二つの条件を一つにする。そのために阿弥陀さまは、ご自身に具わるありとあらゆる功德と同じだけの功德をご自身のお名前におさめ込むという選択をなされた。お念仏を唱えるということは阿弥陀さまに具わる功德に包まれるということ。往生がかなわぬわけがない。阿弥陀さまはご自身が仏であるために、かねて菩薩の時代より、そうした選択をなされていたのである。

さて、四駆にしてエコカー。こちらの選択は、はたして上手いくだろうか。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

日本人の食は「コメ」を食うことにあり

「日本」という国を、ある側面からひとこと言えは「コメの国」ということができます。

理由を挙げると、まず日本人の食の基本は「コメ」を食べることにあります。「一汁一菜」という言葉がありますが、これは鎌倉時代にできあがつた武士の食事の基本で、汁物におかず一品＋漬物という質素なものです。これで大量のコメ（この時代は玄米）を食べたのです。

そんなに昔にまでさかのぼらなくても、明治政府は軍隊をつくるに際して、兵隊一人あたり一日六合（！）の白米を用意しました。彼らはわずかな副業でこれだけのコメを食べ、戦うエネルギーとした。ただし、そのためにビタミンB1不足（玄米には含まれています）。ただし、この時代にはまだ発見されていない）になって大量の脚気患者を生み出したのですが、これをもつてしてもいかにめし（コメ）を食べていたのかわかります。

手軽かつ日本的な朝めしの友のいくつかを思い浮かべても、漬物にしろ納豆や海苔、佃煮類などにしろ、いずれも少量でたくさんめしを食べる

ためのものばかりです。

日本で最初の駅弁は、明治十八年に開業した日本鉄道宇都宮駅で販売された握りめし二個とたくさんを竹の皮で包んだものだったそうですが、携行食もこれで十分だったのです。

あるいは、辞書で「めし」を引くと、「コメを炊いたもの。ごはん」のほかに、「食事」と書かれています。めしを食いに行こうと誘われて、イタリヤ料理店でスパゲティを食べたとしても「めし」です。お昼にラーメンを食べたとしても、それは「昼めし」です。このことも、日本人にとって食事というのとはとも「めし」を食うことに他ならなかったからだと思います。

二つ目は、コメは日本の富や権力の象徴だったことです。今年は今上天皇（即位二十周年ですが、その天皇の儀式として「新嘗祭」という神事があります。コメの収穫を感謝する儀式で、その日は今日「勤労感謝の日」と名前を変えています。今日「コメ作り＝勤労」という言い換えは、なかなか意味深なものを感じます。

ではなぜコメだったか。三大穀物といわれるのはコメ、コムギ、トウモロコシですが、それらの中でコメは単位面当たりの収穫量が最も高いのだそうです。現在の技術ではコメは一粒のタネから二千粒の実をつける。一方コムギは百五十〜百七十粒にすぎないらしい。そのコメの栽培に日本の風土が適していただけでなく、コメは玄米で考えたとビタミン類など栄養価も豊富でした。さらに貯蔵性も高く、連作も可能ということで食糧の中心になっていくのですが、そこから「コメ—富の象徴—権力」という構造ができていきます。コメは税となり、例えば戦国時代や江戸時代の領主の力量は「〇万石」というようにコメの石高で評価され、武士の給料にもなっていました。

この二つ——コメは日本人の食文化の中心だった、コメは日本の権力構造の中心だった——ということからしても日本は「コメの国」と言えるのですが、三つ目は何といってもコメが美味しかったからにはかならなかったからだと思います。前述の駅弁ではありませんが、塩だけで握った握り

めしだって、実に美味しいものです。

そうしたコメの国ですが、実は日本人全部が思い切りコメを食べられるようになるのは、何と戦後も昭和の三十年代、高度経済成長期に入ったあたりからなのです。それまでずっと全日本人の口を賄うほどの生産量が上げられなかったからで、最後までコメに縁遠かったのは、何と生産者である農民でした。彼らにとって「めし」といえば長い間、わずかなコメに雑穀を混ぜた「雑穀めし」や雑穀以外のものを混ぜた「かてめし」でした。だからコメを腹一杯食べることは、多くの日本人にとって憧れでもあったのです。

しかし、戦中・戦後の配給の時代を経て、それがようやく実現したときには、占領国だったアメリカからの「ごはんよりパン」というような食文化が導入されて広がっていて、せっかくコメのめしが腹一杯食べられるようになったというのに、日本人は次第にコメを食べなくなっていました。そしていまや、日本人は何を食べているのかわからなくなっています。

変

な駅

になる駅

《凸凹コンビがおくる駅前シリーズ第四弾》

え 村上 健
ぶん 長谷川 裕



東武 堀切駅

東武伊勢崎線 堀切駅



ああ懐かしの 東武電車よ

かつて東武鉄道の駅は私鉄ながら官営鉄道的な感じがあった。明治の創業当初は蒸気機関車での長距離列車を引っ張っていただけあって、どの駅もホームが長く、それも大谷石で築かれているものが多かった。

東武鉄道の電化はいち早かったが、戦後、長いあいだ蒸気機関車（それも明治の香りふりまくエゲレス製のピーコックであった）の牽引による貨物列車も運行しており、駅によっては機関車を方向転換するためのターンテーブルなんぞが残されていた。

軟弱な他の私鉄とひと味異なり、よく言えば質実剛健、悪く言えば無粋な、いかにも「鉄道」という感じで、東武電車で旅するときは、ともすると国鉄に乗っているかのような錯覚を覚えたものである。

車内も東武ならではの雰囲気があった。昭和三十年代には、連結器のところで「シー、トトトト」などと我が子におしっこをさせるお母さんがいたり、あるいは仕事帰りの労働者のおっさんたちが床にむしろを敷いて酒盛りをしたりと、壮絶なる光景がときおり展開されたものだった。

といって乗客はそれをとがめるわけでもなく、そんなことは車内トランプのうちには入らなかった。いやはや昔の人はタフで寛容だったなあ。

そんな東武電車も、いまでは近代化されてずいぶんきれいになり、床の上の酒盛りも遠い昔の話だ。駅舎も変わった。かつては多くの駅がツバメが喜んで巣を作るような木造駅舎だったが、そのほとんどが高架化などともなっていて、無機質なコンクリートやプレハブとなってしまう、人懐かしい東武電車の匂いはもはや時の彼方へ消えつつある。



なにもないがツバメは
やってきそうだ

そんななか、いまだに木造駅舎でがんばっ
ている伊勢崎線の堀切駅は、そのさびれがあ
いといい、繁栄への無関心ぶりといい、東京

にあって特筆すべき、味わい深い駅のひとつである。「関東の駅百選」などといった、生活とは無縁の晴れがましきもの選ばれていないところも悪くない。

東武浅草駅を出た下り電車が鐘ヶ淵駅を過ぎると、線路は左へ曲がり、荒川放水路のそりたった堤防沿いに進んで堀切駅に着く。小駅にしてはぜいたくなほど長いホームは大きく左へカーブしており、ときおり日光、鬼怒川行きのカラフルな特急電車がスピードを落として通り抜けていく。

小さな駅前広場にはベンキで白く塗られたかわいらしい木造の駅舎がひとつあるきり。自販機と電話ボックスの他なものもない。がらんとしている。商店といえば、駅前を左に入ったところにラーメン屋がポツンと一軒あるが、それだけだ。

駅を出て正面には、隅田川と荒川放水路をつなぐ隅田水門の巨大なゲートと高速道路の橋桁。線路の横手はすぐに道路と土手で、そ

の向こうに荒川放水路の河川敷が広がっている。わずかにある土地は倉庫、工場ばかり。これではいくら駅があったところで、住宅も商店も広がりようがなからう。

目立つものといえば、駅舎横手の柳がなかなか風流である。駅舎にツバメが巣を作っているのもちょっとしたおかしくない。いい感じだ。

堀切ではないのに 堀切である由来

さて、当駅は堀切を名乗るものの、その所在地は足立区千住曙町だ。そもそも足立区に堀切という地名はない。堀切は葛飾区側、すなわち荒川放水路（現在の荒川）をはさんだ対岸である。

では、なぜ堀切を名乗るのかといえば、その昔、堀切と地続きで近かったからだ。堀切駅は昭和の初期に掘られた荒川放水路のために、実際の堀切と泣き別れとなってしまったのだ。



一九〇二（明治三十五年）に開設されたばかりの旧堀切駅は、営業開始後わずか三年目の一九〇五年に休止、さらに三年後の一九〇八年に廃止となっている。といっても荒川放水路の掘削計画が立てられたのは一九一〇年、実際に掘削工事が始まったのは一九一三年だから、掘削工事に追い立てられて休止となったわけでもなさそうだ。乗降客が少なすぎて成り立たなかったのかも知れない。詳しいことは判らない。

しかし、いずれにせよ荒川放水路の掘削工事のため、伊勢崎線は大幅に線路変更しなければならなかったから、移転は余儀なきところであった。当時の伊勢崎線はいまより東側にあり、放水路予定地のどまんなかを通っていたのである。いまの伊勢崎線は旧線より大きく西側に寄っている。

都心にあつてローカルの味わい

堀切駅が復活したのは、放水路の掘削工事が完成し、岩淵水門から水が流されはじめた一九二四年のことだ。堀切駅は以前より西側の現在地へ移転し、営業再開とあいなった。

そのさい、堀切駅とふたたび昔の名前を名乗ったのは、江戸の昔から江都にその名を知られた堀切菖蒲園の見物客を当て込んだからかもしれない。

しかし、堀切菖蒲園へ行くには東武線の堀切駅は、少々遠くなってしまった。堀切橋で放水路の対岸へわたり、二十分ほど歩かなければならない。菖蒲園へは京成電鉄の堀切菖蒲園前のほうがずっと近い。こちらは東武の堀切駅より八年後の一九三一年に開業したのだが、乗降客は二万人以上と、おおいに繁盛している。対する当駅は一日の乗降客が三千人少々。そう聞くと、ほう、これでもそんな



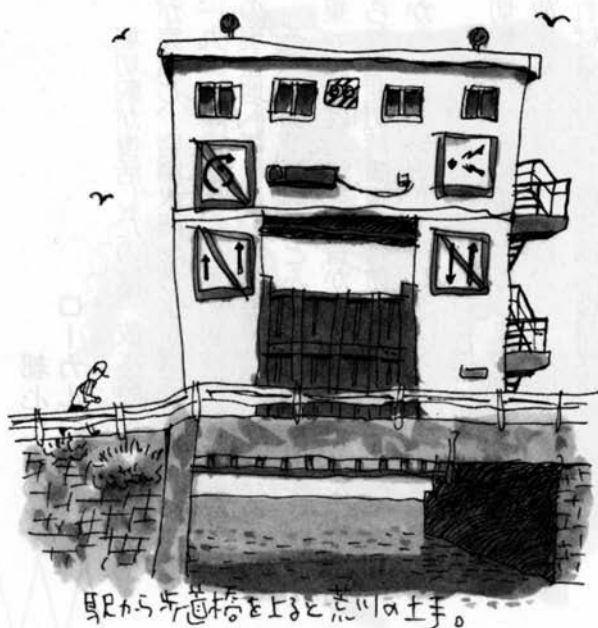
に人が乗り降りするのかと意外に思えるほど閑散としている。

あ、そうそう、なにもないとはいったが、ホームの西側にそって東京未来大学があるのを忘れてはいけない。以前ここにあった区立中学が生徒数の減少から廃校となり、その校舎を改修したものだ。都心にあってローカルな堀切駅は、そのロケーションを買われ、映画やテレビドラマによく使われてきた。この中学校も現役のころ『三年B組金八先生』の舞台となり、有名になったそう。

ま、そんなことはどうでもいい。土手を越えれば広い河川敷だ。草野球をする人や釣り糸を垂れる人もいる。ジョギングの人が走っていく。空には白い雲がぼっかり浮かんでいる。

何かのおりに堀切駅を訪ねたら、土手の草に腰を下ろし居眠りするがよろしかろう。特急に乗って遠くにいくよりも、各駅停車でや

ってきて、こういうところで日がな一日無為に過ごすのも悪くはないと思うのである。



駅から歩道橋をよるときれいな土手。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●堂

〈特選〉地芝居や子役堂々たる演技

中島富士子

農村や漁村では、地芝居が盛んに行われてきた。それが今でも続いているのだ。子役もよく登場するのだが、それが堂々とした演技で、拍手をさらっているのである。村では当然、その話で持ち切りに違いあるまい。

〈佳作〉光堂色なき風の中にあり

佐藤 雅子

僧堂の窓の明るき雨月かな

篠 浩美

葉師堂出入り激しきすずめ蜂

井村 善也

●退

〈特選〉明日退院夕焼け著き窓の百合

石原 新

入院生活を続けてきたが、明日はいよいよ退院できるという。こまごまと帰り仕度をしていると、夕焼けが部屋を染めてきた。窓際

に生けた百合の花が一層華やいで、明日の退院を喜んでくれているようである。

〈佳作〉

鎌倉に退屈しのぎの紅葉狩り

河合富美枝

花野からすこし退き花野撮る

上野 仁

秋しぐれ象は象舎へ退けり

目黒 裕

●自由題

〈特選〉

ぱっくりと割ればほっこりふかし諸

中村 真一

「ぱっくり」も「ほっこり」もそれぞれ、ものやことの様子を言葉で表現する擬態語である。なかなかしっくりとはいかないものだが、二つも重ねて面白い句になった。湯気や匂いが伝わってくるようである。

〈佳作〉

月の雨猿抱き合って眠りをり

小林 苑を

秋の灯にひらがなばかり孫の文

寺下 忠至

島山の月の出囃す子がふたり

増田 信子



誌上句会〈編集部選〉

■堂

新涼の水影淡く浮御堂

河合富美枝

小春日やひと廻りせりさざえ堂

金谷友江

本堂に干物の匂いして雨月

井口 栞

うそ寒の音楽堂に肖像画

濱野具円

鐘撞き堂今日も秋蝶吹かれゆく

石原 新

秋桜の色濃くなりし弥勒堂

井口吾郎

■退

冬帽や人退き際が大事なり

中島富士子

退座する僧のくつまめ老きざす

佐藤雅子

締切・二〇〇九年十二月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年二・三月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

手様 自由題

兼題

季節ではありません

浄土誌上句会
お知らせ

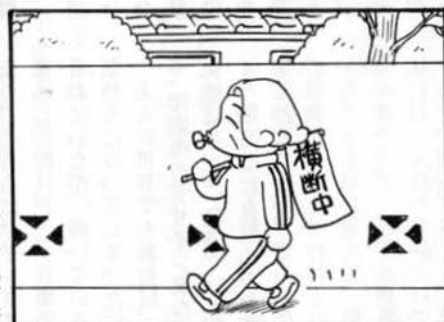
退路なし只前向きに老の秋
退屈をふとらせてゐる通草の実
退学と囁く朝の青蜜柑
退場の役者の煙草秋の雨
秋彼岸過ぎて退院告知あり

金谷友江
小林苑を
鳥羽 梓
三宅月彦
浜口佳春

■自由題

闘病の眼の透きとほる秋の水
カンナ燃ゆ防空壕はこの辺り
梟の瞳涼しく師の忌なり
空便で夕張南瓜届けけり
街路樹の濡れる音して昼の秋
象に象すり寄り秋の昼静か
無花果や人待つ傘を汚しけり
檻抜けて秋蝶不意に落ちにけり
山と積む陶土乾きて天高し
一人降り一人乗る駅秋の雨

中島富士子
佐藤雅子
河合富美枝
金谷友江
鈴木真理子
井口 栞
柏木貞華
三宅月彦
吉崎美和子
井村善也



どんよりの空と心に蕎麦する 岱潤

この間、友人のお子さんとで中学校の音楽教師をしている娘さんの話に驚いた。

最近の学校では、生徒会長とか、運動会の応援団長とか、どんなことでも長が就くのはすべて女の子だという。男の子は女の子に言われるがまま、素直に仕事をし、ときどき女の子から、「やっぱり男の人って力があつて、いいわね」などと言われると、舞い上がってしまったて、一生懸命掃除などをしていているという。一方女の子は、職員室に来て私などには「男って単純よね」と言い、ちよつと独身の男の先生が来ると「先生、素敵」といい

より、こちらにウインクする。なんとも恐ろしい時代だと、音楽の先生ですらあきれていたが、聞いているこちらは寒い気持ちになつてしまった。

大人の世界でも最近、雑誌の編集部や、印刷所のデザイン室などを訪ねると、女性ばかりになつてきていることに気がつく。明らかに女性の方が能力的に高く、まじめで仕事ができるのだという。男性の草食化などと言われているが、もうそんなことも飛び越えて、男性不要の世の中が来そう。科学の世界では何十年か後には、女性の身体だけで子供が授かることも可能になるという。能力本位では確かにそうなのかもしれない。しかし自

然のバランスの中では、何か大きな弊害が起きるような気がする。男性化する女性だけでは済まないはずだ。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十五巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十一年十一月二十日

発行 平成二十一年十二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、西明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三二五七八六九四七

FAX 〇三三二五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
鮎 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

積累善本

善本を積累す
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

職能者の、蓄積された専門技術は、
成熟した社会を示す尺度。

「大盛り！」と言えば、並よりはやや多めに盛ったそばが出ます。蕎麦屋さんは、並と大盛りは、反射的に手加減で盛るが、まず狂いはないと。要するに、大盛りの量は常に一定しているとの話でした。

繊細華麗なカットグラスの花瓶を造るガラス工、釘一本使わずに障子の棧を造る指物師、この手は習慣化した作業の蓄積した「神の手」。

経験の蓄積による技術はかけがえない財産です。保育園や幼稚園の先生、老人の介護師、歌舞伎の役者、呉服売り場の店員、観光地のバスガイド、対人関係の仕事では、歳月と技量の高さは正比例します。

職能者の蓄積された専門技術は、成熟した社会を示す物差しです。

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

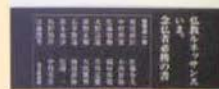
『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱包料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より